

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02609

研究課題名(和文) ウィリアム・グリフィスの日本観の研究

研究課題名(英文) William Griffis and Japanese religion

研究代表者

牧野 陽子 (Makino, Yoko)

成城大学・経済学部・教授

研究者番号：70165687

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、明治三年に福井藩のお雇い外国人として来日した、アメリカ人ウィリアム・E・グリフィス(William Elliot Griffis, 1843-1928)の日本に関する著述を分析し、その日本観を根底で支える宗教観の形成についての考察を行ったものである。

明治期以降に来日した英米人のなかで、主にラフカディオ・ハーンと対照させることで、一見正反対の立場をとった二人の日本体験の再評価を試み、19世紀から20世紀にかけての、西欧の対日観の原点と変遷を“宗教”をキーワードにして示しつつ、そこからみえてくるさまざまな問題に光をあてて考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでのグリフィス研究は、お雇い外国人の草分けとしての貢献の内容や来日前後の足跡、交流のあった福井藩の人々の調査など、もっぱら伝記的、実証的な研究に重点をおいてきたといえるが、本研究においては、異文化接触の諸問題を問うより広い文脈のなかで、その思想をとらえなおした。

特に、キリスト教に対する立場が正反対であったラフカディオ・ハーンと共通する根底的な異文化対応のあり方、神道の理解を浮かび上がらせたことは、多文化共生、ひいては多宗教共生の必要性が問われる現代社会における意義が少なからずあると考える。

研究成果の概要(英文)：This study was intended to analyze and reevaluate the works of William Griffis, an American who had spent several years in early Meiji Japan as a science teacher. Griffis had written books on Japan, and although a missionary, showed a deep insight into the religious life of the Japanese people.

By comparing him with other Japanologists, this study demonstrated how Griffis showed a striking resemblance with Lafcadio Hearn in his way of capturing the innermost spirit of another people, which I believe, is most needed in the modern globalized world.

研究分野：比較文学比較文化

キーワード：ウィリアム・グリフィス ラフカディオ・ハーン 明治 神道 外国人の日本観

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、明治三年に福井藩のお雇い外国人として来日した、アメリカ人ウィリアム・E・グリフィス (William Elliot Griffis, 1843 - 1928) の日本体験の再評価を試みたものである。グリフィスは、福井藩の藩校明新館で、廃藩置県翌年は大学南校 (東京大学の前身) で化学を教えた。四年間の滞在の後に帰国し、故郷フィラデルフィアで牧師の仕事に従事しながら、『皇国』(The Mikado's Empire, 1876年) など、数多くの日本に関する著作を著わした。

そのグリフィスは、これまで、来日外国人教師としては、例えばラフカディオ・ハーンなどとは正反対の立場にあるととらえられてきた。グリフィスはキリスト者であり、宣教師でもあった。お雇い外国人として日本の西洋化と近代化を全面的に肯定し、支持した。従ってハーンのように西洋を脱出した風変りな文学者ではなく、アメリカを代表する「正統派」の日本研究者の一人とみなされてきた。

ところが、グリフィスの日本に関する著作を読むと、興味深いのは、日本の文化、とりわけ日本の宗教に関する言説が、例えば同じく「正統派」日本研究の第一人者として評されてきた英国人バジル・ホール・チェンバレンとは逆で、むしろ、ラフカディオ・ハーンと響きあう部分が多いということである。すなわち宣教師でありながら、神道や仏教の民間信仰に対して共感に近い言葉を発しているのである。

グリフィスは、日本での最初の日々を東京ではなく、古い文化と習慣の残っている地方の一都市、福井で過ごした。グリフィスの作品や日記、手紙類には、ハーンの著作同様に、時代の雰囲気と風景と土地の人々の暮らしがよくとらえられており、『皇国』のなかの日本体験記の部分は明治の日本の地方生活を描いた作品としてだけでなく、一人の若者、二十八歳の青年の異文化体験の記録としても、極めて魅力的だといえる。そして、さらに、現代においても、日本がグローバル化社会を生き抜くための根本的な秘訣をその著作のなかに見出すこともできるのではないかと考えられた。また、代表作の『皇国』に比べて知られていないが、グリフィスは日本の民話や昔話の翻訳を三冊刊行している。それらの民話集に収められた、全四十六編の話には、グリフィス自身の創作と考えられる短編も何点が含まれていて、そこにもグリフィスの日本像が読み取れるのではないかと考えた。

### 2. 研究の目的

これまでのグリフィス研究は、お雇い外国人の草分けとしての貢献の内容や来日前後の足跡、交流のあった福井藩の人々の調査など、もっぱら伝記的、実証的な研究に重点をおいてきたといえる。が、本研究においては、より広い文脈のなかで、その作品と思想をとらえなおすことを目指した。異文化と宗教に関わる根本問題に光をあてつつ、多文化共生、ひいては多宗教共生の必要性が問われる現代社会において、グリフィスの日本観が提示する普遍的な意味を明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

グリフィスの日本観を分析するため、代表作『皇国』と『福井日記』以外の、これまで取り上げられることの少なかった民話集や、東京時代の日記、手紙、メモ類などの未刊行資料を読み込み、その分析と解釈をも重視した。さらにハーンをはじめ、チェンバレンやイザベラ・バードなどの日本観との比較を行った。またグリフィスの足跡を、具体的にひとつひとつたどり、グリフィスが見聞きしたものの詳細を明らかにすることもを試みた。つまり、未刊行資料の読み取り・分析と、グリフィスの歩いた土地を探りながら歩くというふたつの作業を行いつつ、グリフィスの言説の最終的な比較分析と解釈にあたっては、エクスペリカシオン・ド・テキストの手法をとった。

### 4. 研究成果

本研究は、明治3年に福井藩のお雇い外国人として来日し、帰国後は牧師をしながら日本関係の著述を多く残したアメリカ人ウィリアム・E・グリフィスの日本観の再評価を試みたものである。その言説を比較文学・比較文化の手法を用いて分析し、そこからみえてくる文化と宗教に関わる根本問題に光をあてて、グリフィスの思想と日本観の現代的意義を明らかにすることを行った。

複数の異なる方向からのアプローチを行ったが、結果的には、2つの切り口に整理された。宗教観と民話の再話である。宣教師志望だったグリフィスが、日本人留学生との親交がきっかけで日本という国の文化と民俗に興味を抱くようになり、福井の庶民の暮らしぶりに親しんだグリフィスの日本体験の本質を抽出するのに適しており、また、逆にグリフィスの言説から、明治初期の日本の宗教的感性と、民俗的想像力を描出することを行った。

初年度は、特にグリフィスの創作民話を、再話作品として読み、そこからグリフィスの日本観を浮き彫りにすることをえた。(論文「ウィリアム・グリフィスの日本民話集について - 「蛭姫の求婚者」と「雷の子」 - 」)

グリフィスは日本の民話集を三冊刊行しているが、ここでは、第一作 Japanese Fairy World: Stories from the Wonder-lore of Japan, 1880, をとりあげて、その序文と全体の構成にグリフィスの日本民話編集出版にかけた意気込みと、民話観がみられることを明らかにしたうえで、グリフィスの創作民話二点を取り上げた。「蛭姫の結婚」の話では、グリフィスの創作民話が 19 世紀末のヨーロッパに広まっていった経緯をも示し、また、「雷の子」の話では、グリフィスの作品が、日本の雷神信仰や“雷神の子”説話の伝統と、どう結びつき、どう異なっているか、そしてグリフィスが何を語ろうとしたのかを論じた。

再話にあたって素材としたいくつかの日本の伝承、さらにその源流とされる中国の伝承を分析することで、それぞれの背後の伝統的な自然観を明らかにし、そのうえでグリフィスの日本観の投影された民話の魅力を見出すことができた。民話の分析に関しては、民俗学の研究成果、古代中国の伝承との比較研究の成果をも取り入れることで視野が拡大され、大きく比較文化論の枠組みで捉えるようにした。また、グリフィスが福井に取材した地元の伝承や民間信仰など、創作民話の素材になりえた断片的な資料や、知識や見聞についても調査を行った。

二年目には、明治以降、駐日外国人の親睦研究団体である日本アジア協会での中心的話題のひとつであった神道論争との関連で、グリフィスとハーンの紀行文における風景描写や生活点描をとりあげた。そして多くの外国人がキリスト教と比較して“いいかげん”で“真剣性に欠ける”したがって“宗教の名に値しない”と評した日本人の信仰心に、両者が宗教的寛容性と楽天的な人間中心主義を見出している点に着目し、今こそ日本人の宗教的感性を再評価すべきではないかと主張したエッセイ (CEL 論文) を書いた。

また、明治神宮とアイルランド大使館共催のシンポジウムで、「来日外国人のとらえた神社の姿」に関して講演を行った。彼らがどのように日本の宗教建築をとらえ、理解したか。アイルランドとウェールズをルーツにもつハーンとグリフィスが、なぜ日本人の宗教的な感性に共感しえたのかについて話をし、その内容は明治神宮の紀要に掲載された。

そしてアメリカのプランズウィック、およびイサカでの調査取材を行った。プランズウィックのラトガース大学グリフィス・コレクション所蔵の未刊行の手稿書簡類をフィルムに収め、日本からアメリカに持ち帰った民芸品・工芸品・生活用品類などの民俗資料をも見ることができた。また多くの執筆を行ったイサカ時代についても、町の歴史資料館を訪ね、グリフィスが最後に奉職したイサカの教会の場所を突き止めることができた。

三年目には、前年発表した明治初期外国人の神社観と神道解釈について英語で発信するため、同内容の英語論文に書き下ろし、日英対訳の書物として刊行した。

最終年度では、グリフィスの宗教論の分析の周辺研究に時間をさきつつ、都内のシンクタンクで「欧米からみた神道」と題して講演を行なった。明治初期における西洋人の神道発見について、チェンバレン、グリフィス、ハーン、柳田国男等を中心に論じたその内容を含め、グリフィスの日本観を明治以降の大きな流れの中で位置づけた本研究全体の成果を、8 月刊行予定の著書『ハーンとグリフィス』にまとめた。

グリフィスの日本に関する著作に関して何より興味深いのは、宣教師でありながら、日本の神道や仏教に対して共感に近い言葉を発したということに尽きる。

グリフィスのこのような日本観は、いかに形成されたのか。グリフィスは、日本での最初の日々を東京ではなく、古い文化と習慣が残っている地方の一都市、福井で過ごした。この地で、グリフィスは、押し寄せる西洋の“力”に抗しうるものを、変わらぬ民衆の宗教生活のなかに見出したと考えられる。さらにグリフィスの知識を豊かにしたのは、東京で接した若者たちであった。彼らはただグリフィスにそれぞれの郷土の民俗や風習、歴史などの情報を提供してグリフィスの著作に貢献しただけではなかった。グリフィスは彼らのなかに、西洋近代と向かいあう日本人としての、あるいはそれぞれの郷土人としてのアイデンティティの問題と知的なエネルギーを見出した。一方、グリフィスの日記や書簡には、感性の瑞々しさと素直さ、謙虚さ、そして共感力がみられる。大英帝国の意識が強く、西洋文化とキリスト教を絶対的に正しく不動の基準とするチェンバレンやバードとの基盤の違いがそこにはある。

グリフィスのそのような柔軟な日本観は、第二次世界大戦後は、ルース・ベネディクトやライシャワーの日本観の陰に追いやられてしまった。だが、グリフィスの著作に読み取れる日本像や日本の宗教のあり方は、むしろ 21 世紀の今日、新たな意義をもちうるのではないかと考えられる。今日、もはや 19 世紀のキリスト教宣教師の多くに見られたような、ひとつの“正しい”“意味ある”宗教があるとする考え方は薄れてきた。多民族多文化共生社会を認めることは、多宗教共生社会を認めることだからである。現代のグローバル化社会において、グリフィスが見出した、日本人のゆるやかな、ある意味で“大雑把”な宗教的感性はきわめて重要な意味をもつと考えている。



## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 牧野陽子	4. 巻 12
2. 論文標題 読書の時間 小泉八雲が日本を深く理解できた理由は・・・	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 月刊 正論	6. 最初と最後の頁 296、299
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牧野陽子	4. 巻 2
2. 論文標題 ラフカディオ・ハーンが見た神々の国・日本	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明日への選択	6. 最初と最後の頁 3, 10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牧野陽子	4. 巻 228
2. 論文標題 “Chin-chin Kobakama The Fairies of the Floor-Boards” と新作狂言「ちんちん小袴」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 経済研究	6. 最初と最後の頁 161,184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牧野陽子	4. 巻 18
2. 論文標題 ラフカディオ・ハーンがとらえた神社の姿 ～ “A Living God” をてがかりに～	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 神園	6. 最初と最後の頁 70,86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牧野陽子	4. 巻 114
2. 論文標題 ラファディオ・ハーンが見た寺と神社の風景－日本人の宗教的な感性	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 C E L	6. 最初と最後の頁 20, 25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 牧野陽子	4. 巻 211
2. 論文標題 ウィリアム・グリフィスの日本民話集について～「蛭姫の求婚者」と「雷の子」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 成城大学経済研究	6. 最初と最後の頁 73, 114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 牧野陽子
2. 発表標題 「小泉八雲のみた神の国、日本」
3. 学会等名 明治神宮 第27回 国際神道文化研究会 日本・アイルランド外交関係樹立六十周年記念講演 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 牧野陽子
2. 発表標題 「ラファディオ・ハーン作"Chin-chin Kobakama, The Fairies of the Floor-Boards"と新作狂言「ちんちん小袴」」
3. 学会等名 民俗学研究所主催ワークショップ「能・狂言をめぐる東西の往還」 (招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 平川祐弘、牧野陽子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 錦正社	5. 総ページ数 252
3. 書名 神道とは何か What is Shinto ?	

1. 著者名 牧野陽子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 -
3. 書名 ハーンとグリフィス	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----